

私がなぜ現在の科目を選んだか

「眼科」

信州大学医学部眼科学教室

菊 島 涉

私が眼科医を志した理由の一つは、診察の特殊性です。第一関門の眼底診察では苦労しました。初めは瞳孔の真後ろの範囲くらいしか見えなかった眼底が、徐々に周辺部まで見えるようになる喜びは、眼科医にならなければ実感できません。自分では地の果てまで見えたかと思うほど周辺部まで観察できたつもりが、上級医の半分ほどの範囲しか見えていないことも少なくありませんでした（今も?）。お釈迦様の手の中を我が物顔で飛び回る孫悟空の気分とはこういうものであったかと痛感したものです。

大学病院での眼科診療において、もっとも深く関わる疾患の一つは、白内障でもドライアイでもなく、意外にも網膜剥離でした。網膜剥離というと、どこか「ボクサーの職業病」のようなイメージを持たれがちです。しかし網膜剥離の患者さんが多いからといって

「長野県というのはよほど拳闘が盛んな地域なのだろう」などというのはとんだ見当違いで、それこそ上級医から左ストレートをお見舞いされてしまいます。実際にはボクシングなど外力による網膜剥離はごく一部であり、硝子体の加齢性変化に伴うものがほとんどです。網膜は外側の色素上皮から栄養を受けているため、剥離が起こると徐々に網膜視細胞が障害され、最悪の場合失明に陥ります。網膜剥離の患者さんは早急に手術が必要となるため、受け持ち患者さんのほとんどが網膜剥離の方であり、昼の外来では「今日は網膜剥離の患者さんが来るだろうか」と気をもみ、家に帰っても「術後患者さんの網膜は復位しているだろうか」と眠れぬ夜を過ごす、これほど何かを気にするのは初恋の時分以来のことではないでしょうか。

入局から早5年が経ち専門医も取得しましたが、まだまだ分からないことだらけで、手術の腕も未習熟とあって、たかだか直径2.5 cmほどの眼球ですが、なかなかどうして奥の深い分野だと感じます。超高齢社会におけるニーズの高まりをひしひしと感じつつ、精進の日々を送っております。

(信大平19年卒)

私がなぜ現在の科目を選んだか

「耳鼻咽喉科」

信州大学医学部耳鼻咽喉科学教室

岩 佐 陽一郎

私が耳鼻咽喉科を選んだ理由、それは非常に単純で、「一番飲み会に誘ってくれたのが耳鼻科だったから」です。本当です。

もともとに実家が医者をやっているわけではないため、何科になるかはあまり決めておらず、漠然と「手術をやる科に入ろう」とだけ考えながら学生時代をすごしていました。そんな中、耳鼻科に初めて接触したのが3年生時の自主研究でした。特に耳鼻科に興味があったわけではなく、「宇宙医学」というめずらしい単語が書いてあったため選んだのです。それをきっかけに宇佐美教授をはじめとした医局の先生方との出会いがあり、お酒を酌み交わしているうちにいつのまにか現在に至る、といったわけです。実は耳鼻科は外科系なのだとそのときに知りました。

入局してみても実際耳鼻科という科は私にとって合っ

ているな、と思います。手術のバリエーションが豊富で、頭頸部癌の手術はダイナミックさを感じますし、一転して耳科手術ではミリ単位の非常に緻密な操作が要求されます。一人の執刀医がまったく毛色の違う手術をこなすことができる、これは他の科にはない一つの魅力のように思えます。今後腕を磨いてぜひそれらの手術スキルを獲得していきたいと日々精進しているところです。また、年代ごとに応じた手術に挑戦することができるため、入局直後から執刀医としてたくさん症例を経験することができました。手術予定に執刀医として自分の名前が載るのは非常に快感なものです。

動機はお酒でしたが、耳鼻科は手術がバリバリできて、学問的にも奥が深い魅力的な科です。今後も自己研鑽を重ねつつ、日々の診療に当たっていきいたいと思っています。

最後に、現在の初期研修のシステムでは、いろいろ経験ができる故に診療科の選択には迷うと思います。しかし、こんな出会いもあるということです。肩肘張らずに、「これだ」と思った科に飛び込んでみるのもひとつかと思っています。

(信大平19年卒)